正實 朝鮮征討始末記

三

和書門
類 二五一四五 號
函 一九六
架 一三
冊 五

內閣文庫
和書
類 二五一四五 號
冊 五
函 一六八
架 七

內閣文庫
番號 和 25145
冊數 5 ( 4 )
函號 168 86

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫圖書

# 朝鮮征討始末記卷之三

對州　山崎尚長　輯
村一善　校

## 小西加藤黑田陥津合戦之事

日本小西行長加藤清正黑田長政等京城を進發して陥津の南に陣を取る朝鮮の軍勢江中に大船と數艘繋ぎ浮め址岸に陣を取て江灘を守る但江を隔て鉄炮を放ち矢軍の〳〵ゆゑに數日渡る事を得ざるに小西加藤黑田謀を巡らし俄に陣屋に火を掛けく引取るけり朝鮮の軍勢とも和軍の敗らるると討ともめむし急に進むべく追懸たる加藤小



国立公文書館
National Archives of Japan

西の軍勢とも崩れ立ち我先きと逃げ走る敵山の後より切所に入りたる時兼て設け置きたる伏兵一度に吶と突て出る朝鮮勢此處にて大崩になり敗走し寄手氣に乗じて猛兵急に追懸けれゞ敗軍の朝鮮勢江の岸に至るとゝ云つゝも渡る支を得ず岸の上下に水中に飛入〳〵溺死せり逃げなくれたる者共は寄手頻りに追懸るに一人も双向ふ者なく立足もなく敗走とゝと追詰〳〵撫切にする討ち捨けり向ひの岸に居たる朝鮮勢是を見て逃来味方を救ふとせば一同に逃走りて和軍大に討勝て防津を渡り黄海道の安城駅に着陣し爰にて人馬の足を休め

其より黒田長政は黄海道に赴き小西行長は平安道加藤清正は咸鏡道に赴きける

**朝鮮**　副元帥申恪は初め金命元都元帥に従て副将たりしが漢江の崩れにも金命元に従ひて楊州に居たりつゝ時に咸鏡道の兵使南兵馬節度使李渾が兵を率て申恪は李渾と兵を合せ日本勢の京城より出て市町を打〻散掠すと邀へ撃破りけり京城守護の日本の勢の楊州に在る者を討散さんと打出るに申恪に出合ひ戦ひに及ひ浮田勢崩れ立て敗北し追首六十余級朝鮮勢に討取られ是に合て日本勢の朝鮮に入りしより始て の捷軍ゆゑ人皆踊り上り悦びくゝ然るに金命元防津に

在りて申恪擅に他處に適て都元帥の号令に從はざる由を注進して右相右議政俞泓遽に之を誅せんと清ひ宣傳官を差下せしに此捷軍の注進至りしかば跡より追手を遣して止めけれども及ばず終に軍中にて斬られぬ此申恪は武人にして素清慎なり嘗て延安の府使たりし時城を修め壕を深くし軍器を多く備へ置ぬ後に李廷馣延安を守りて城を全く持堪へたり沿人以為らく申恪が功なりと云へり此たびの死其罪に非ずして上に九十歳に及びたる老母有りしを聞く者あれを痛み哀まぬは無かりけり

知事韓應寅平安道江邊の精兵三千人を率ひて陸津に赴て日本勢を擊たんとす金命元が節制を受る事勿れとなり金命元は副元帥申恪の号令に從はざると注進して罪に坐せらるゝ也左相尹斗壽諸人に向ひて斯人の狀貌福相あり必能く事を弁ずと云へり應寅遂に命を受て陸津に向ひけり初め金命元は陸津の北に在て諸軍を分て江灘を守らしめ江中の船を斂めて悉く北岸に置たりしゆゑに日本勢も陣屋を陸津の南に結び船の渡るべき無れば但遊兵を出して江を隔て交戦する事十餘日なりしかども敵終に渡事能はざりき一日日本勢江の上の陣屋を焚拂ひ帷幕を撤ひ軍器を取片付け退

き道々の状となして朝鮮勢と誘きくるを申碕ず軽鋭して謀なるものゆゑ以為敵實よ道々ぞとして江を渡つゝ追討むとし京畿の監司權徴も申碕と一致なれど金命元も禁ぜる事能はず是の日韓應寅も著陣し悉く衆軍を以て追討むとし應寅ゞ率る所の者皆江邊の健兒武士と云ふ日本ゝても昔と同じ北虜女直と近くて備よ戦陣の形勢とも諳じたる者どもなれど應寅よ告て云軍士遠く来て羅弊たるよ尚未ぶ食せず器械未ぶ整らず後軍の兵も来て揃ふ且敵の情偽も未ぶ知ざれば頼くハ少く休息あて明日勢ひを觀て進ゝ戦ふべしと云ひけれど



も應寅ハこゝる場よ軍支を押留るは曲事なりとして其者を斬て戒めくる金命元ハ應寅ゞ新々よ國王の命を承け来て日已ゞ差囲と受る事勿れとの事なる故よ不可と知ると雖も敢て云ふべ別將劉克良ハ年老て兵よなれど力めて言ふ軽々ゝ進むべゝと申碕怒て斬らむとし克良云我髪と結朝鮮のゝ童ハ髪を之ゝ組て長く後ろよ垂れ元服の時結髪して冠ゝ笠と著ル因て然云ふ又総じて早年と結髪と云ふ てよも軍陣よ從ふ豈死を避るを以て心とせむや云ゝる所以の者ハ怨くハ國事と誤らむ耳として憤くゝして外よ出て其手勢と率ゐて真先よ渡る朝鮮の軍勢共進むて既よ險隘の地小ゝる倭軍

果して精兵と山の後より伏せ置き一時に俱に起立ち、こぐ朝鮮の軍勢奔走潰ゆ劉克良馬より下りて地上に座して此吾死らる所也と寄て敵數人を射倒しその身も終に討れ乃至申砦も亦討死し軍兵共奔つく江岸に至れば渡る事と潜び岩石の上より自ら江に入る者恰し大風に木の葉の乱れ飛ぶが如し其まゝ江に投らるゝに及ばざる者共も敵後ろより長刀と奮ひてこれを斬る皆匍匐双を受て敢て手向者ハ無りけゝ金命元韓應寅江北より望て見て氣を喪ふ高山君朴忠侃折ふし此軍中に在しら馬に騎て真先に走りたれバ諸人是を見て以為金命元



なりと皆云元帥走りたるよし呼ばゝれバ諸軍の江灘と守て居し者共聲に應ずて呼ばゝれけるゝ我先に散ず失せ乃ち金命元韓應寅ハ行在とさして引還しけるゝ國王よりも其罪を問ひ京畿の監司權徴を加平郡に入て乱を避さるゝ日本勢いよ〳〵勝に乗じて西を指て攻下りなゝく拒ぎ止むべきやうハなきなり

加藤清正入咸鏡道攜兩王子之事

日本去程に加藤清正は安城駅より小西里田と立分れ咸鏡道へ志し安城の居民を擒へ此者ハ案内せさせて押行けるに是より先きに和学通詞和学清学漢学蒙古学有り咸延虎と云者

生捕是と通詞として諸軍と競ひ京城を出て十三日目小咸鏡道の指口安邊に着陣し茲ふて鍋島を待合せ五月十六日加藤清正鍋島直茂両勢共に安邊を打立て三日目小長橋に陣を取る是より清正八手勢一萬を引率し老里峴を踰え鉄嶺の北に出て日に行事若干里勢ひ恰も海潮の涌くが如くなる處に北道の兵使大軍を帥ゐ来て海汀倉と云處にて碪と行遇たり北兵ともに射騎に長けたれば矢ぶすまを作て散々に射る

庶曷尚礼義屬北府縣民皆精悍習弓馬云て同書に屬之長枝在弓馬又曰平安咸鏡二道接靺鞨俗尚弓馬云て安鏡二道北舊に近思八靺鞨女真唐為黒水靺鞨八女真の古名女真和軍ハ白い處と騎馬の

北兵一度に吐と駈け立る森本儀大夫井上庄九郎一番に槍を入れ戦ひくるるの日已に黄昏に及び清正も戦ひ屈し兵を引て一村に屯し北将又士卒を引率し取圍むで夜討ともくる此處に大倉あり米穀多く籠置しば清正倉の中に俵米を取運ばせ積み雙び其蔭より鉄炮を数ちくれば透間も無き程に立比びたる北兵共さんざんに打ちくれ遂に敗北し山上に引退く其夜清正敵陣の廻りふ兵卒を伏置既に未明に及びくる比四方より鉄炮を放ちく攻入るしのば北軍一さくもせび奔走し清正の兵士追詰て討取け北将も勢ひ盡て鏡城に逃込くと

清正追つ懸て息をつかせず攻寄せ屏際に着くと等しく諸勢乗込切く迴りくる北兵共散々に討なされ北將も此震々に討れ給ハ遂に鏡城も攻落しけり斯て清正ハ晝夜と分たず押行くる程に都城と立て六十八日目に會寧と云る四里朝鮮の四十里に云處に著きくるに扨朝鮮の王子ハ日本勢と怖れて會寧迫落来て城に入て暫くも止まらず此會寧ハ朝鮮にて流罪人の居處にて方三里朝鮮の三十里の廣野あり其れに山あり石壁を高く築き城の如くに作り置て王城よりの流人を籠め置廣野に粟稗ホの雜穀を作て渡せしくるる朝鮮國にて流罪に絶島定配極辺



遠寨云科あり右の内極辺に云ハ咸鏡道鐘城等と云つるもの是なり彼流人どもに徒黨をして王子ハ此城中の者共に敵なる幸ひ今こゝに来れるを搦み日本人に渡して年来の恨をと晴さんと議しくるを會寧の吏も衆に出くめるもれ忽ち心変して清正の陣に使を遣しく王子を搦みて渡さんと云越しくるに清正大に喜び其夜の未明に陣處を打立ち常に秘藏せし驥月毛と名ばくる名馬に乗て真先に駈けしハ我一に後れじと逸足出して馳せくるふて行程四里の間を只一瞬に駈付くる城中にハ門と打ち静まり居たるくれハ清正美濃部金大夫に書翰を認めさせて王子を渡らべき旨を

云遣しくる會寧の吏より返簡を王子に渡らず諸人の命を助け所領を賜ふべし旦城中糧盡て王子といへども二三日口中の食を断て糞くハ朝餉の支度をして王子に送るべと云送るに清正再答に條々聞届けて明卯の刻小勢を以て城中に入るべき由云越しくるに清正の老臣共評議を為て若し敵の謀計にて大將を討取らむとの手段にてもあらむ又左なくとも案内とも知らざる異國の城中に大將の小勢にてうの〳〵入らるん事思慮なきに似たり所詮誰にても清正なりと名乗て王子を請取べしと云いひしに清正聞て何ものの申處一理ありと云へども吾日本を出



しより骸を朝鮮の苔に埋て國王を討取るべしと思い定めて渡海せし處幸ひに此處にて王子に追付たり今一命を惜しみ手延にして是王子を取逃しに他人の手に渡しるバ無念の至りなり敵偽りて吾を欺き付むとしても朝鮮の弱兵何程の変あらむ何せしも孤疑なる変なりしとて糊餉の支度せしに究竟の勇士共に饌膳酒有りて色〻饗應の具を持しせ六十餘人後人に仕立置清正ハ近習十五六人を従へ城中に入るに至て裏の体を見るに長七八町程に廣さ六十間も有らむとおびゝしき馬場あり其傍に館舎にて王子これに居るに清正此處に至りて對面

あわ拝答の礼終りて膳を供へ兼て相図の通り士卒等弁
當よりせ椀折敷其外の器物と一人る一色で持せ六
十餘人迄と入りたりと王子よ附添ひ居たる者共うれる驚
き騒立ち王子を討てと心得半ろを驚て清正を射むとん
清正うれ如何ろ制しわれども言ハ通ぜず士卒共
聲こよ喚きる程猶進み迫づきて今ハ危く見えるこの清
正きつと思案と廻らし異國ろし印章と以て約をしと云
夏あわと思ひ出し懐袋よりと印を取て出し彼の印判と紙
よ貼し一人づつよ與へしつば其意通じるふや是えて静
まりて皆こ矢と迯して礼となりる清正危き場と遁れて



其後家来の者共ろも度こ語られるは日本ろて數度戦
場よ出ろこ云へ小ろも是程の危難よ逢ハび會盟よ印章と
用ゐると云ふ夏を知らぜんバ大死ちべうはるでと云
ちれしろの清正ハ王子其外の者共と鏡城よ籠め置き
警固の士卒と残し是と守らせ随分饗應らべき旨申付
置き猶北東ろて押行路この城邑残りなく攻落し放火
ろて勇猛と示し朝鮮の國民清正と鬼上官と呼て怖れ々
操期會ろて春秋二度宛船軍のなりを敵船と囲
攻戦の修練ろこれと俗よ肥後しの調伏と云ひるる
深く怖れる國民清正の勇猛と朝鮮の東北極女直界迄攻
入る所謂女直ハ寒國ろて北ハ七月中旬なるよ霰降り

風雨烈しくして久しく此所にて後藤と云つる通詞を一人生捕りたり此者ハ元来日本松前の者なりしが漁船に乗りて悪風に漂され思ひもよらぬ此處に漂着し既に二十年を経たり蝦夷志に廷尉去此而踰北海と云考うるに義経も蝦夷に女直の奴児干に至られなりと云へば女直男の朝鮮の東北極咸鏡道と蝦夷と若干里隔るとも海上直矩ハ差わさし成べけれバ松前より漂著せしと云も有べき也因て女直口朝鮮口と自由につのひくれバ能き通詞なり

とて是を郷導とし其名を後藤次郎と改めくるる後藤云ふ此處より天氣快晴なる時坤の方に當て日本の富士山近く見えけるとなり或説富士にてハ有べうハ薩州の海門ケ嶽なるべしと云又一説海門ケ嶽なるべしと是的説也茲ハ



昆布多き所にて昆布にて民屋を葺き居住せり日本人も初めハ昆布と云事を知らざりけるゆゑに是を知て屋根をめくりて恙なく食しくりて日本松前の昆布ハ蝦夷に繁茂して東北夷海を経て朝鮮海に連て共間遠遠なれども咸鏡道に多く生ずと云斯て清正ハ後藤次郎を郷導として初め九日路にて来りて近路を経て五日路にて元の鏡城に凱軍わが夫より鏡道と打立数日を経て安邊に著陣し暫く軍勢を休め居られる處に浮田秀家并石田増田大谷の三奉行連署の飛札備前の家士三騎早追にて持来て大明の援兵来て朝鮮軍勢共氣を得爰彼こに起て城頭に迷惑に及び清正も

早〻引返さしかと合さるべしとなり

韓記曰、清正出兵于女直境、剽掠村里屢矣、築城于金山、使加藤與三右衛門其兵三千守之、又一城築于橘中、使九鬼四郎兵衛天野助左衛門山内甚三郎其兵三千守之、清正到咸鏡道、御人民以撫育之恩、屢與酒肴以悅之、依是人皆懐之、時群盜蜂起、陣塞清正歸、釜山浦後路、故且城諸將欲召清正、浮田秀家使其家臣三人裁連署之書遣于清正而速召之、清正答曰、吾亦欲之、然豈可棄金山橘中兩城之軍兵乎、并合彼兵而歸、且城耳、清正即發自咸鏡道、使齋藤立本庄林隼人龍造寺又八郎其勢五千先進迎與三右衛門、



清正亦継發、既而齋藤立本庄林隼人等到金山、時群盜大起、重圍金山、立本隼人見之、揚鞭励兵、攻擊甚急、群盜敗走、死傷者尤衆、立本入城中、問與三右衛門如何、答曰、與敵兵相逢、奮戰而既死矣、立本隼人聞憐之、火其骨而歸、其後清正率兵攻群盜悉平之、合金山橘中之城兵而歸王城、清正早速安邊を打立、三日目に長橋に著陣有る、此處は鍋島加賀守直茂相良宮内少輔頼定在陣して、手途に出迎はし、兼て陣城を拵へ置て是に在陣し、治ぶと直茂申さる、清正大に喜び、扨加藤鍋島の士卒の城、一手と分け、籠め置したるゆゑ、清正直茂より城〻と明け長橋へ来

るべき由美図ある此時北地みても朝鮮勢處くゝよ聚て日本勢を打留んと道路を塞ぎ拒ゝけゝどゝし清正の士加藤清兵衛加藤傳藏片岡右馬允直茂の士鍋島平九郎成隅十左衛門龍造寺七郎左衛門以下の一騎當千の剛の者共朝鮮勢を駈破るゝ首長槁ゝ駈せ来るゝゝを於て主計頭清正加賀守直茂宮内少輔頼定生捕の西王子以下を率ゐ總軍異儀無く十六日目より王城へ著陣せゝゝゝ偖清正両王子を捕へ王城より歸るゝゝる由即ち書を馳せて名護屋へ注進を遂らるゝる大閤大よ怡悦あり主計頭の勲功拳て等ふべゝべと云へども今度の戦功ハ異國にて其





國王の子と両人迫生捕たる事公類なれ平柄賞ゝるゝよ猶あるとして有るとして吹毛斜なゝべゝして感状よ添て吉光の脇指并よ黄金五百両褒美ゝして賜ひゝて清正の武功感賞せゝ者ハ無るゝゝう一書よ曰此軍行や朝鮮の國妃と王子と與よ落去る侍女頭よ一物を係て覆面せゝて其一物凡一尺計て蓋し牛の脯也と云て朝鮮人牛肉を賞翫せる事甚て象番紀聞よ曰州（牧使）府（府使）郡（郡守）縣（縣令）監（監兵使）水（水使）一日牛二頭て京中よて一日よ牛三十頭計十頭計て壮土の交易よ年中五六百頭又各鎮（鎮戍地）一月よて二三頭て屠て賣る牛を屠る者を白丁と云監官と云る内よて牛の吟味役あて恐て私よ殺ス者贖銅の罰あて云ゝ和館よて館守一代官三代官通詞以下迫歳末の祝儀の束脩よ判事共よて牛の脯を贈る鷄林の牛肉萬國よ勝れたゝゝ和館中の家僕ゝも交易して都會よて

貶く谷丸茶となりて服れ脾腎の要薬補虚の良方よりて乃ち普くせの知れる家々近時江戸屋敷の村氏より施し出れもの也

其功著し　清正の先駆将より此を捕つむと清正曰顔面を視る事勿れ侵し掠る支勿れ鰐犯る支勿れと知らぐる体よりて飲食を與へて逃去らしむ　努く不沙汰有で〳〵と堅く下知せしるゆえ士卒命を守り知らぬ顔して食物を與へ已が心任せよ逃去らしめ朝鮮人ども清正乃驍勇と鬼神の如く畏れ怖れ其情けあるを深く感じ也

**朝鮮**　日本勢咸鏡道より乱れ入両王子敵の軍中より陥る従臣金貴栄黄廷彧黄赫及び李道咸鏡の監司柳永立北兵使北兵馬節度使咸鏡道南北兵馬節度使と云ふ使道ハ左右節度使と号い韓克誠等も皆執られる南兵使南兵馬節度使李渾ハ走て甲山小至りて朝鮮の士民の為め害せられ南北道の郡県皆敵軍に陥没せるも倭学通事咸廷席と云者あり京城に在けるの日本の大将清正の為め生捕られ同く清正に随て北道迫入りの敵軍退て後退て京城に還り柳成龍に對面して北道の支を語りの頗る詳なり柳清正ハ敵将の中にも尤勇悍にして善く闘ふ平行長と同く臨津を渡り黄海道安城駅に至り二手に分れて攻入らむと謀てくがいづれの何れに向ふべきと決定なるべけれハ両将間に行長ハ平

安道と得清ニハ咸鏡道と得たり是ニ於て清正安城の居民二人を擒く道の向導となせ一ム二人共ニ辭ひるる此地ニ生長して北路を存ぜびと云清正一人を斬て捨ゝし八一人懼れて先導仕らむと請ふ谷山の地より老里峴を踰えて鉄嶺の北ニ出て日ニ行事數十里勢ひ風雨の如一北道の兵使韓克誠ハ鎮沙寧永興延川端川穩州隨城の兵を率ひて海汀倉まで行遇たゝ北道の兵ハ騎射を善一地又平衍なれ朝鮮勢左右ニ分れてこゝ出且馳せ且射ふけれど日本勢支ふる能ハず退て倉中ニ入る時ニ日已暮ゝる軍士ともに休ひて敵の出るを俟て明日復戦む



とゝ云れども韓克誠聽入れず軍卒を指揮してこれを取圍む日本勢ハ倉中の穀石を取出一列置き城と為一以て矢石を避け其内より多く鳥銃ヲ發ちこれを朝鮮の軍兵櫛の齒を以づたるごとく立て重疊して束ねるが如くなるこうば中れハ必貫穿れ或ハ一丸ニ三四人を打斃されし一軍遂ニ大崩れとなりぬ克誠ハ兵を收めて退き嶺上ニ屯一天明を待て又戦ふ日本勢ハ夜潛ニ朝鮮の軍の後ろを環て敢て草間ニ伏居たり翌朝て大霧うてものゝ見分けも成難ゝ時朝鮮の軍勢ハ猶も敵兵ハ山下ニ在ると思ひ一ニ忽ち一聲の銃砲響く程こゝあれ四

面より大に喚ひ叫んで突てゝる皆日本勢也朝鮮勢驚き大崩れて方々将士等敵の無き方へと向ふて奔走し悉く泥沢の中に陥る處を日本勢追つめて撫で切に し其数さゝ者数を知らず克減やう〳〵道に出て鏡城に入て逐に擒に せられぬ両王子陸海君順和君ハ俱に會寧府に至る蓋し順和君初め江原道に在て敵兵こゝに江原道に攻入けるゆゑ道を轉て北道に向つゝ是時日本勢王子を追詰来る會寧の吏鞠景仁と云者同類を率て謀叛して王子及び從臣を縛て日本勢を迎へ〳〵敵将清正其を解き軍中に留め置き引返して咸興に屯し深溪君尹卓然ハ路中より病ひと称して路をこゝ〳〵別害堡とさして行ぬ同知李賢ハ王子に從てハ江原道に留まりゆゑ皆執られを免れて柳永立ハ敵の陣中に數日拘へられて居たりこの敵も文官と思ひ防禁少き〳〵懈てゝる間に乗て脱し走て行在に来てぬ

## 小西行長押陰大同江之事

日本去程に小西行長ハ安城駅より加藤清正と立別し鳳山迄来て國王平壌におくられ聞えしのは黒田長政宗義智と同く路程を急ぎ遂に六月十日大同江の南岸に到て前隊の兵數百騎進むで江中に馳せ入て〳〵江中

の小島より居住せる士民共大より驚き周章て東西へ北げ走る小西が軍勢猶く進むで大同江を一息に渡らんと皆く馬と乗入れ〳〵游ぎて既に岸近くなりたる處に北岸の朝鮮勢の中より精兵とうらびたると見え指結引結数は同じく渡り掛り軍兵いと的よりて十騎計射斃されそのぼ小西が勢進みうね逐に本の岸に引返し南岸に陣を取れり北岸は朝鮮勢守り居けり

**朝鮮** 李鎰は既に忠州より敗軍し江を渡り江原道の界に入りさま〳〵と轉輾して平壤の行在に至る時に朝鮮の諸將は京城より南方へ下り或は討死し或は逃走りて一





人も駕に從ふ大將無く敵將に至らんと聞えしかは人心益懼れあひぬ李鎰は武將の中にも素より重名有れは敗軍の將なれとも人〳〵其來らんと聞て喜ぶぬは無りけり李鎰は既に屢敗軍し荊棘の中に竄れ忍ひて頭に平涼子竹笠の事なりへと載き身に白布衫と穿ち屢朝鮮の土民履しみとはけて至る形容憔悴たるを觀て歎息せぬは無し柳成龍云此処の人皆公とたのみて力らとなる而るに枯槁の如く衰へぬる体にて何をもて諸人の心を慰めんと行嚢旅中の中より藍色の紬袴裏らを出しを與へけり是より於て諸宰臣或は駿笠馬尾にて作る笠或は銀頂子笠の上の銀ぬ

餞の纓緒の茅と與一くると目前にて著換ひ給ふ服の飾り一きれ新しく成るめるを獨り靴を脱て與る者なりと
けるに故猶も草履を著て居たりしに錦衣を草履ハ釣合ぬ
ぶと諸人一笑せり斯て碧潼の土兵任旭皇と云者物見の
註進して敵軍已に鳳山まで来りぬと告げ来る然る
に詠歸樓下の水ぬるく二つ三つなる淺くして渉るべし
萬一敵軍朝鮮の士武を案内せば暗に江中を渡り猶に押
寄来らば城を危き事なり其の淺瀬に渡りて守り
むべしと李鎰を遣りぬ李鎰萬須臺の下に至り城を距
る纔に十四里日本の一里餘の江南の岸を望み見るに敵兵来り聚



る者已に數百江中小島の居民共驚き叫て逃散ぬ李鎰急
に軍士十餘人をして島中に入りしと射しと云軍士畏
れて進まず李鎰劍を拔てこれを斬らんと欲ぬ然後人み
な進むに敵ハ已に江水の中に打入り多く岸に近つく
と朝鮮の軍より急に強弓を以てこれを射連るに七人
射斃せば日本勢遂に引退く李鎰仍て留て渡口を守りぬ

重軍勢渡海朝鮮之事

日本去る二月太閤秀吉數萬騎の軍勢を朝鮮に遣し朝鮮
既に破れぬ是て明より援兵の来らん事を慮て且都
城の制法諸士の押への為め之奉行を始め又數萬騎の軍

勢を指向らる一番は増田右衛門尉長盛石田治部少輔
三成大谷刑部少輔吉隆前野但馬守長泰加藤遠江守光泰
と一列とし二番は浅野左京大夫幸長宮部兵部少輔南條
左衛門尉木下備中守豊屋新五郎齋村左兵衛尉中川右衛
門大夫秀政別所豊後守明石左近一柳右近将監遠藤右馬
丞吾出羽守竹中源丞石河備後守服部采女正を一列とし
三番は池田少将輝政細川越中守忠興長谷川侍従秀一木
村常陸丞岡本下野守小野木縫殿丞野村兵部少輔糟谷内
膳正片桐東市正直盛舎弟主膳正貞隆高田豊後守古田兵
部少輔藤掛三河守太田小源太早川主馬正毛利兵部少輔



亀井武蔵守茲任を一列とせり茲は伊達陸奥守政宗は會
津を領せられ又二本松も討てられを取られる去る天正十
八年相州小田原陣の時太閤は謁ろせられ此時浅野弾正大
弼長政を以て朝鮮は渡海せむ事を望まれこうば大閤許
容有り長政も嫡子左京大夫幸長を召つれ政宗と倶に
朝鮮へ赴る石田三成増田長盛大谷吉隆等は大閤の朱印
を持らし六月諸勢名護屋に發船し其書の略小諸士不敢
怠惰横行于朝鮮大明儼其武備正其製法而可也と云斯
て重て指向らるる處の諸軍勢朝鮮へ着陣有しは先達
て渡り込たる諸卒弥勇んとなり日々諸邑を侵し掠め攻

取る處の城々に人數を籠め置て守らしむ先づ釜山浦の塁には筑前中納言秀秋目附役太田小源太安骨浦には立花左近少監宗茂加徳には高橋九郎筑紫上野介竹島には毛利久留米侍従秀包西生浦には浅野左京大夫幸長太田飛騨守其外王城迄の城々に軍勢を分て守らせ諸軍傍きかゝりし平壌を指て押寄ける

朝鮮 遼東の都司某うたがひ怪しみ鎮撫林世禄をして倭情を探らしむ為に朝鮮に来らしむ柳成龍是の命を承て唐将の接待を致せり（馳走役也）此時遼東には日本より朝鮮を犯すと聞き未だ久しからずして又都城も陥り國王西に



還ると聞え既に又日本勢平壌迄至ると聞えしかば甚だこれを疑ひて以為日本勢の變いかほど急なるとも箇程猝還るに付有べからず或ひは朝鮮は日本の為に先導を為るならんと疑ひぬ柳成龍其疑ひを霽さしめむ為に相伴ふて練光亭に上て形勢を望し見せけるに折ふし一人の日本人江東の林木の間より乍ち見え乍ち隠れけるが已にして二三人も継ぎ出或は坐し或は立意態安閑として道路に休息しける状の如し成龍指示して世禄に云けるは此日本の物見なり世禄柱に倚りしかど望し見て殊に不信の色有て日本の兵は何よりて斯く少きやと云ふ成龍

う云日本ハ巧みなりて詐謀多く大兵後に在りて雖先来て偵ひ探る者數輩に過ぎず若し其ぶと見てられと忽に去る時ハ必敵の術に陥らむと云世禄なりつきて亟に回咨書付を求めて馳せ去りぬ

玄蘇調信會李德馨之事

日本去程に小西行長ハ平壌に著陣なりて京城の諸将一使を馳て平壌を攻落さむ支掌の内にあれむ不日に平壌城を陥いれ其ゝ鴨緑江を濟て明に打入るべき旨を云ひ遣くん字喜多秀家と始め諸将評議有て全羅慶尚の各郡未だ悉くしたがひ後ろに大敵を置かゝ鴨緑江を渡



うたば敵の大軍我後ゝを襲ふの前後に敵を受けるば進退いかゝむ先重兵を京城に駐め舟手の勢を以て西の方全羅に向て遠く西海道を大兵水陸ともに並び進むで戦ふ支全計なるべし猶良策を廻らすゝ苔なしとも是に於て行長思慮を廻らし僧玄蘇柳川調信に命じて朝鮮李德馨に書簡を送て直談せむ支を云遣りけ德馨小船に乗て出来て玄蘇調信等と面談し玄蘇云く日本道と朝鮮の道路に明に通せむと欲して朝鮮これを拒むに此の如く干戈なりて今に領掌有らば無事に成らむと云李德馨返答に先兵を引

取れよ其上にて和議を成らべしと云調信等日本勢の勇猛斯のごとくなる上は和談に随うしかむに實に朝鮮は粉々ひとと諭せど徳馨默して遂に各別れ去る日暮れうど小西はそれ軍勢を押出し大同江の東岸に陣を張て晦天の氣をで顯くしくるる

朝鮮　左相左議政尹斗壽に命ぜ都元帥金命元巡察使李元翼等を率ゐて平壤を守らしむこの時已に城を出らるべきを定めもども何方をそして適む所を知ゝ朝臣多く言ふ北道の地僻にして路も險くれば以て兵禍を避くるに宜しと蓋し是時敵軍已に咸鏡道を犯して道路通ぜざれば其變を報る者なく故に其たる知るべきなる也是に於て同知李希得曾て永興の府使たりし時惠政有て民の心を得たりと以て咸鏡道の巡察使とし兵曹佐郎（六曹に正郎佐郎各有）金義元従事官とし北道に往しむ而して内殿（王妃及び宮嬪）以下先城を出て北に向ひ諸士議論区区たり知事韓準何分にも北道に向くべき事便利なりと申ものを内殿遂に咸鏡道に向くる時に敵大同江に至て已に三日に及ぶも柳成龍等練光亭に居たりて江の向ふる一人の日本人才の先きに小さき紙を付け江沙の上に立置たを火砲匠金生員として小船に棹さして往てこれを取

むるに日本人の兵器を帯らざる者出来て金千歳に書と附して以て送りぬ其書至りて既き視れば書面に朝鮮國礼曹判書李元翼下に上るとて有て蓋し李德馨に與ふる書にして平調信柳川豊前守玄蘇仏巣の書をもてむる處なり其書の大槩德馨に見えて和講を議せむとなり因て德馨扁舟に乗て平調信玄蘇に江中にて會し相勞問する事平日の如し玄蘇云日本路を借て中國に通ぜしめば事無らむと云德馨曰兵を退きめて後和講を議せむと云調信等應對の語頗る不遜なり遂に双方別れて去る其夕べ日本勞數千人江東の岸上に陣を張る

## 小西行長等大同江岸對陣之事

日本斯て小西行長宗義智松浦鎮信有馬義純大村純忠五島純玄等數軍を率めて平壤城を攻むとて江岸に屯し先手の兵は内に入るも河一馬をのり入たれども水深けれバさ程渡るべきやうもなく樵勢ばかりもやとけり又歩兵乃中に大兵のものくもきに長さ五六尺又ハ七八尺計の大刀を木にて作り銀箔を押たるを各ふりかゝげ往来しけれバ日に映てきらめきけり其程遠くなれば城兵ども木刀にて知らざるの此大刀にも氣を奪はれ大に怖れたると見えて日本勢ハ江を隔てゝ城に向ひて頻に

鉄炮を打掛け朝鮮勢ハ精兵の射手と勝て舟よりの七川乃中流よ至て寄手を射せらるるもの大河なれど日本勢もはらなく渡りてでもいつらばされども久しく雨降らひ尋常の川くは馮水せる折なれバ浅瀬くる知て無二無三よ押わたるを切まくる程なるバ朝鮮勢の怯弱直ちよ撃破らむ事や有つる若し大雨降つゞき水ゝ増る程ならばいよ〳〵渡り難ゝ〳〵今の内よ事なるゝと各熟とらもたるる評議して何國欤浅瀬なるむと諸軍日ゝ河邊へ出て水面を彼方此方と見廻せども未ゞ浅瀬と覚えき処を考へ當らゞ只河水の一面よ滾〳〵と流るゝと見る計るていのむしも為べき方なく十餘ヶ所よ陣を取て互よ河水を阻て〳〵日ゝ矢炮の迫合のゝふゝ此河しゝ越らゞくも見えさりゝ諸軍勢手を摩て頗る退屈の色見えゝゝ

朝鮮　六月十一日國王ハ平壤を出て寧邊よ向くる大臣よを崔興源俞泓鄭徹等扈從し左相尹斗壽元帥金命元巡察使李元翼と平壤の留守ゝ柳成龍ハ唐將接待ゝて〳〵留る是の日日本勢城を攻む尹斗壽金命元李元翼柳成龍練光亭よ居たゝ本道平安の監司宋言慎大同城の門樓を守て兵使李潤德浮碧樓よて上の江灘を守て慈山の郡守尹裕後等長慶門を守る城中の士卒民夫合て二四

千有余の城堞に分配せり一つの部伍に一つづゝ城上の人或ハ跳或容或ハ人の上に人立て肩と背と磨て合ひ或ハ數の塚に一人も無きも有て衣服とも容臺の近邊の松樹間に掛け疑兵と名附たり江を隔て敵軍を望み見るに左程大勢とハ見えず東大院の岸上に一字陣を排作一文字に列わて紅白旗を竪ふ恰も朝鮮國の挽章の如し挽章ハ死を送る時其人の徳行を述べ書て旗の如く葬式に持ふ其中に十餘騎を出し羊馬墻に向て江中に騎入るけるに水深く馬腹に及ばざれば皆鐙を按て列て立て將に江を渡らんとするの状を見て其餘江の上に往来



する者或ハ一二人連れ或三四人で何れも大劔を持たり日の光に閃く恰も電の如し或人云真劔なれ非れ木を以て拵たるに白蠟を沃うけて人の眼を眩なるもの云て然れども遠く見分け難し又六七人鳥銃を持て江邊に来て城に向て放ちしに其聲甚ぶ高く丸江を過て城に入る遠きものハ大同館に入て瓦の上に散て落つ其間幾千餘歩云はず或ハ城樓の柱に中て深く入事寸に及ぶ又敵の紅の衣裝なる者陳光亨の上に何れも會座せり將帥なると知て鳥銃を挾て邪視て去る進て渚の沙の上に至て丸を放つ

に亭上の二人を中る然せども遠きの故を重く傷つのべ軍官姜士益云者防牌の内より片箭矢の長さ一尺五六寸なる細き木を樋の如くなるにてその樋に片箭をのせて腕一杯に引くこれを放つ時片箭計遠く飛ひ行樋の木ハ指より殘る朝鮮の長技なりと以てわれを射さしむ矢遠く飛て沙の上に及ぶ紅衣の者逡巡して却ぞく元帥金命元善く射る者と下知して快船に乗せ中流にて敵を射させる此快船稍東の江岸に近くなれど敵又退き避く朝鮮軍の船上より玄字鏡玄の字を刻る大鏡を發ちて箭の大さ椽の如くなるを江と打越しけるを日本勢各仰ぎ視て皆喝きのめきて箭の地に落ちるを爭ひ聚まりてこれを觀る是日兵船を整へ



さるを以て工房の吏一人を斬る時に久く雨ふりて江水日に縮る曾ち宰臣を遣て兩を檀君名ハ王儉朝鮮國の元祖と云大白山檀木の下に降る國人立てこれを國朝鮮と号ハ平壤に都ハ唐堯の時也周武王殷に克ち箕子中國人五千人を率ひて朝鮮に入る武王乃箕子を朝鮮に封ハ平壤に都ハ是を後の朝鮮と云民に礼義田蚕織作を教ふ東明王姓ハ高名ハ朱蒙高句麗の始祖何れも始に記む柳成龍ハ唐將と中路に出迎へ〻と従事官洪宗祿辛慶晋と城を出夜深けて順安に至る路中にて李陽元に從事金廷睦に洛陽より來る小達ふ日本勢已に鉄嶺に至るなる由を聞く鉄嶺ハ咸鏡道安辺府の内に有る加藤清正鉄嶺近来て両王子を捕へ北地を悉く攻伐て南地に志るるを云ふ也翌日肅川に過ぎ安州に至る肅川安州共に平安道にて成

龍の過る愛也遼東の鎮撫林世禄又来て対面して咨文軍門の書付と請取て行在に送るその翌日國王既に寧邊を出て博川に泊りし聞て成龍も馳て博川に請てそれより成龍は出立て大定江の邊に至るに日已に西に傾きぬ遥に後を回望られぞ廣通院の野に散卒絡繹来り有て扨は平壤も守て成失ひ給へる軍官数輩として馳往て此者共を聚めさせくるに十九人を得て来る乃義州龍川等の處の軍卒にて平壤に往て江灘を守て居たる者也此者共言昨日六月十四日敵已に城灘を渡て江上を守る軍兵大崩れにまなり兵使李潤德逃れ走りたりと云成龍大に驚き即ち路中に書状を認め軍官崔允之に馳て行在に報ぜしむ夜嘉山郡に至りぬ是日夕内殿博川に至れると聞く蓋し是は路まて敵兵加藤清正已に北道に攻入りぬと聞て故先まく行き回へされしかと聞えて平壤陷りぬと聞て國王は嘉山に止まり世子は博川に入られぬ

朝鮮征討始末記巻之三終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan